

# 致知BOOK WEB

本物の生き方に出逢う読書のすすめ

www.chichi-book.com



- 好評シリーズ Popular Serie
- 安岡正篤シリーズ Masahiro Yasuoka Series
- 森信三シリーズ Shinzo Mori Series
- 渡部昇一シリーズ Shouchi Watanabe Series
- 生き方/人生/教育 Life, Education
- 経営/ビジネス Management, Business
- 歴史/人物/古典 History, person, classic

致知BOOK WEB > 今日の「一日一言」

RSS配信中:

## 今日の一日一言

致知出版社の大好評『一日一言』シリーズから、毎日の心の栄養となる、今日の「一日一言」をお届けします。

### 洞察力を養う 2009年07月31日(金曜日)



**洞察(どうさつ)**とは物事の裏にある本流を見抜くこと。また、外側に現れない人の心、内面の動きを読むことも洞察である。

洞察力を説く風地観(ふうちかん)の卦(か)には、洞察に至る段階が次のように記されている。

第一「童観(どうかん)す」——幼い子供の目。何が起きているかという現象だけを観みる。

第二「窺(うかが)い観る」——人の見解を聞いて物事を窺い知る。広く世間を知らず、小さな視野で物事を観る。

第三「我が生(せい)を観る」——主観的に観る。自分を省みて、出処進退の行動を判断するが、まだ客観視には至らない。

第四「国の光を観る」——物事を客観視できる段階。国民のささいな表情やしぐさから、その国のリーダーのあり方、国全体の情勢を察する。表面にとらわれず物事の質を観る段階である。

第五「民を観て我が生を観る」——起こっている物事を写し鏡のように観、物事全体を正しく導くために何をすべきかを知る。

要するに、現象だけを観る、人の話から物事を窺い観る、自己中心的に物事を観る段階では洞察力は及ばない。深い洞察のためにはまず、全体を広く客観視する大局観を養わなくてはならないのである。

まぐまぐ殿堂入り

**人間力・仕事力が確実にアップする**

致知出版社 Officialメルマガ

登録

書籍検索

- ▶ カテゴリーインデックス
- ▶ 著者名インデックス
- ▶ 書籍名インデックス

検索

今月の月刊『致知』

8月号特集 「感奮興起」

特集「感奮興起」◎対談◎師弟感奮興起物語「世界の王」はこうしてつくられた荒川博(日本サッカー協会副会長)&王貞治(福岡ソフトバンクホークス球団会長)

▶ 詳細はこちら

SPECIAL WEB SITE

chichi-yasuoka.com

安岡正篤先生に関するウェブサイトです

昇一塾

渡部昇一ファン倶楽部

### 時の三要素 2009年07月30日(木曜日)



易経の表す「時」とは、時間だけでなく空間をもいう。

- ・時(時間)
- ・処(場、環境、状況)
- ・位(立場、社会的地位)

この三位一体の時を表している。いいかえれば、時は「天」であり、処は「地」であり、位は「人」にあたる。

したがって、物事の対処にあたっては、今という時、環境、立場にあって、どうすべきかを考えなくてはならない。

### 麗沢(りたく) 2009年07月29日(水曜日)



**麗沢(りたく)**は兌(だ)なり。君子もって朋友(ほうゆう)講習す。(兌為沢(だいたく))

兌為沢(だいたく)の卦(か)は沢が二つ重なった象(しょう)を持つ。「麗」は付く、並ぶ。二つの沢が地下水脈を通じて互いの沢を潤(うる)おし、枯れることがない。同じように、君子は心の通じる友である「朋友(ほうゆう)」とともに切磋琢磨(せつたく)して、「講習」知らなかったことを学んで知り、「習」すでに知っていることを繰り返し、身に付けていく。

学校関係の団体や寮に「麗澤(れいたく)」という名が多いのはこの言葉に由来している。

### 直(ちよく)・方(ほう)・大(だい) 2009年07月28日(火曜日)



直方大(ちよくほうだい)なり。習(なら)わずして利(よ)ろしからざるなし。(坤為地(こんいち))

「直(ちよく)」は、素直、実直、真っ直ぐに進む。「方(ほう)」は正方形の意で、方正、また東西南北、四方八方に広がる様子。「大(だい)」は遍(あまね)く盛大に。直方大は天に従い、万物を受容して遍く育成する「地」の徳である。

教えられたことを私情や理屈で曲げずに、素直に受け入れて実践できる人は、知恵の一滴を与えられただけでも、習わずとも盛大に伸びていく、といっている。

### 戦いの勝ち方 2009年07月27日(月曜日)



万邦(ばんぼう)を懐(なつ)くるなり。(地水師(ちすいし))

戦争の勝ち方を説いている言葉。戦争をする際は、戦った国々を味方にしていくような勝ち方をすべきである。勝って相手を殺すのでは、戦後の繁栄はありえない。

これは現代社会でも通用する。経済競争でも相手を潰すのではなく、相手を生かす勝ち方を考えなくてはならない。そのためには勝ち取った利益を還元し、人々の賛同を得る努力をすることである。利益を独り占めしようとすれば、それ以上の成長は望めない。

### 碩果(せきか)食われず 2009年07月26日(日曜日)



碩果(せきか)食われず。(山地剥(さんちはく))

「碩果(せきか)」とは、大きく実った果実のこと。山地剥(さんちはく)の卦(か)は小人(こじん)がはびこり、君子(くんし)が追い落とされるような非道(ひどう)な時代を表すが、そんな混乱の中にあっても、大いなる果実は食い尽くされずに残っている。一度地に落ちるが、それによって芽が生じ、また発展するのである。

この果実は傑作や蓄財などと考えてもいい。そうした大きな原動力が残ってさえいれば、乱れた後の世の中は泰平(たいへい)の時代になっていくことを示している。